

意図を悟ってひどく狼狽する。

「ちよつ、臨也さん、あの、何してるんですか!」

「何って、脱がそうと思つて。もしかして着たままが良いの?」

何を今更、とでも言いたげに臨也は言つた。こうするのが当然だ、と言わんばかりに。

「いえあの、そういうことじゃなくて!」

「じゃ、良いよね。全部俺に任せれば大丈夫だから」

「だだだ、大丈夫じゃないですつ、良くないです、絶対ダメですつ!」

びた、と臨也の動きが止まる。ここでわかつてくれた、と思う帝人は愚かだった。臨也がそんなに聞き分けが良いはずもなかった。

「何で?」

「何で、つて。いくら恋人ごっこでも、あの、ごっこなんですし、そこまではやつぱり問題があるつて言うか。それに男同士ですし、こういうことはやつぱりその、うわつ」  
必死で言葉を紡いでいる最中にひよい、とばかりに抱き上げられ、また慌てる羽目になる。臨也よりは小柄だが、それでも高校生男子だ。細身とはいえ、それなりに体重もあるのにあまり苦もなく抱き上げるあたりが恐ろしい。そしてナチュラルにいわゆる『お姫様だっこ』なのはこういうことなのかと問いたい。が、そろそろ帝人はパニックに陥りつつあった。

連れて行かれたのは、案の定と言うべきか寝室だった。

シンプルなデザインの、大きなベッド。いよいよ臨也は本気らしいと知る。

「大丈夫。俺、上手いし。安心しなよ」

「安心できませ……っ!」

もはや反論も抵抗も無意味だった。どうやら臨也はとにかく遂行する気満々で、そして帝人はこの上なく非力だった。

しかもそのうち抵抗を忘れるほど、臨也はあまりにも巧みだった。キスはもちろん、触れ方も、そのタイミングも絶妙だ。弱い部分をすぐに暴き出し、簡単に乱れさせる。確かに上手い、のだらう。初めての帝人には良くわからないけれど、とにかく気がつけば全裸で、彼にあらゆるところを触れられていた。

「ひあ、——っ、や……っ」

臨也の姿がぼやけて良く見えない。それで、自分は今、泣いているのだと知る。ぐちゅぐちゅ、と耳をふさぎたくなるような水音が聞こえた。その音が自らの性器から聞こえている、とわかっているから余計に恥ずかしい。躊躇う様子もなく、臨也がその部分に触れているのが信じられない。

「気持ちいいんだ?」

くす、と。耳元で彼が笑いながら囁く。ふるふると首を横に振つたが、それが嘘だと言うことは形を成した帝人の分身が証明している。だって、今まで他人の手がそんなところに触れたことなんかない。